

結社

世界でもっとも短い詩であることを俳句は誇りとする。しかし、俳句のユニークさは、それにとどまらない。有季定型も他に類を見ない様式である。さらにそれに劣らぬ特色は結社の文芸であることだ。

かつて、詩を書くイギリス人と雑談をしていて、こちらが日本には俳句の雑誌が五、六百はあると言ったところ、相手は目を丸くして信じない。作者の数だろう。雑誌がそんなにあるわけがないと言っているのである。しかたがない。「文芸家年鑑」をもつていつて、ようやく納得させることができた。彼はつよく感銘したようである。詩の結社というものを知らない西欧では、考えも及ばないことだろう。

そんなことがあつて、結社が俳句にとって世界に類を見ない存在であることを改めて考えさせられた。結社の雑誌があるから、作品を毎月のように発表できる。読者をもつこともできる。創

作意欲もかき立てられる。

ところが日本人、俳句をつくる人は、かならずしも結社を喜ばない。それどころか、なにか恥すべき古い殻のように感じていることもある。

俳諧を近代化して、発句から俳句へ展開させたのは正岡子規であるが、その改革は考えられているほどの改新ではなかった。

五七五のリズムは温存し、季語を必須とする有季定型は子規によって改めて確立された。子規の否定した俳諧を支えた基本である連衆の変形、拡大したものと見ることで結社は承認したのである。外国の近代文芸思想に背を押されて俳句の創造に当たった子規にしてみれば、外国に例を見ない連衆が許されないのは当然で、その同類である結社も否定されてしかるべきであった。それをそうしなかったのはさすがの洞察であつたと思われる。結社なくして、その後の俳句の発展はなかつたにちがいない。

結社をなくしたら、作品を発表する場がなくなる。作品は発表されてはじめて、作品としての生命をもつことができる。さらに、詩の志とも言うべきものを共同体意識としてめいめいが育むこともできる。

俳句という短詩型文芸が育つには結社という土壌が必要である。結社をいかにも古いように考える近年の若い世代は、そこを誤解して、个性的であると錯覚しているのである。

結社が組織である限り、なにがしかの拘束は当然であろう。それをただちに、自由が失われているように考えるのは短慮である。なにごとくも自由第一とするのは政治的思考である。

俳句は短詩ではあるが、短命であることを欲しない。つよい生命をもった作品にするためにはどうしても結社による同時代批評が不可欠になる。

一般に文学作品の歴史的寿命は不安定なもので、数十年の間の試練によく耐えたもののみが古典の座を与えられて後世に伝わる。作者の手もとで古典になった作品はかつてない。

結社俳句は、その数十年の批評をいわば前倒しにして、早々と受けることができる。作品を生かすか殺すかの後年の批評的試練を結社俳句は毎月、涼しい顔でやってのけているのである。そういう根源的批評は作者にとって愉快なものではないであろう。だからと言って、結社不要などと早まってはならない。結社があるからこそ、俳句は制作早々にして古典的になることができる。世界に比を見ないとする所以である。

いつか、ある結社誌で、添削を批判した若い人の文章を読んだ。欧米では作品の自律性が尊重されていて、いやしくも他人の表現を改変するようなことはない。そういった趣旨であった。考えが違っている。添削は改良の創作である。いわば古典化のプロセスでもある。俳句が添削を怖れ、嫌うのは賢明ではない。

T・S・エリオットの『荒地』は二十世紀最高の英詩のひとつである。その『荒地』の原稿が

数十年雲がくれているという逸話がある。作者エリオットが亡くなって、ニューヨーク公立図書館から出てきて大騒ぎになった。

実は、『荒地』は作者の原稿通りが発表されたのではない。畏友エズラ・パウンドの徹底的加筆、削除を受けたものが作品になった。作者はもとの原稿の惨状を人目にさらすことを怖れて、あえて隠したのかもしれない。それはとにかく、この詩は、パウンドの添削によって、発表と同時に古典になるという希有の幸運をつかむことができた。

もっとも、ときには添削によって悪くなることもないとは言えないが、まずたいていは、良くなっている。自分でする推敲はたかが知れている。他人の、ことにすぐれた力をもった人の添削は、作品をいくらかは古典化に向けて動かす。

俳句は添削を恥じるべきではない。結社の文芸であることを後ろめたく思うのは間違っている。